

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	ペロブスカイト関連構造を有する陰イオン導電体の合成、構造、電気化学特性
Title(English)	
著者(和文)	松井直喜
Author(English)	Naoki Matsui
出典(和文)	学位:博士(理学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第11401号, 授与年月日:2020年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:菅野 了次,平山 雅章,荒井 創,北村 房男,和田 裕之,中村 二郎
Citation(English)	Degree:Doctor (Science), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第11401号, Conferred date:2020/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第		号	学位申請者氏名		松井 直喜	
		氏名	職名		氏名	職名	
論文審査 審査員	主査	菅野 了次	教授	審査員	和田 裕之	准教授	
	審査員	平山 雅章	准教授		中村 二郎	特任教授	
		荒井 創	教授				
		北村 房男	准教授				

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文では、ペロブスカイト関連構造におけるヒドリドイオン、酸化イオン、フッ化物イオン導電体を開拓し、同一陽イオン骨格を有するこれら陰イオン導電体の系統的な評価を行った。陰イオン導電性に優れるペロブスカイト骨格において、陽イオンサイズの減少や、陰イオン空孔の多量導入、空孔の不規則配列化によりイオン導電率が向上することを見出した。本論文は、陰イオン導電体の合成と結晶構造、イオン導電特性の関係をまとめたものであり、日本語で記述され七章から構成される。

第一章では、イオン導電体開発の概要とイオン導電体の設計指針を説明し、ペロブスカイト関連構造の特徴とイオン導電特性について述べている。さらに、ヒドリドイオン、酸化イオン、フッ化物イオン導電体に関する研究背景と位置づけを説明した上で、本研究の目的、意義について記述されている。

第二章では、陰イオン導電体の合成手法と構造解析手法及び電気化学測定的手法について記述されている。

第三章では、常圧下における自己フラックス法を用いた La_2LiHO_3 固体電解質の合成方法と、イオン導電特性、デバイス構築について記述されている。 La_2LiHO_3 の原料である LiH を 200 wt.% 過剰量用いた自己フラックス法により直方晶系 La_2LiHO_3 が合成可能であることを明らかにした。常圧合成法で得た La_2LiHO_3 焼結体を用いた水素濃淡電池は、Nernst 電位に近い起電力を示し、 La_2LiHO_3 焼結体が気相/固相/気相構成の電気化学デバイスに応用可能であることを示している。

第四章では、 K_2NiF_4 型構造を有するヒドリドイオン導電体 $\text{LnSrLiH}_2\text{O}_2$ ($\text{Ln} = \text{La}, \text{Pr}, \text{Nd}, \text{Sm}, \text{Gd}$) を合成し、 Ln 置換がイオン導電率に及ぼす影響が記述されている。 Ln のイオン半径減少に伴い、活性化エネルギーが減少し、 $\text{GdSrLiH}_2\text{O}_2$ は $\text{LnSrLiH}_2\text{O}_2$ における最も低い活性化エネルギー ($E_a = 67 \text{ kJ mol}^{-1}$) の値を示した。一粒子ポテンシャル法により、 Ln のイオン半径減少に伴う活性化エネルギーの減少は、 H の拡散の方向に沿った確率密度分布の増加に起因することを見出した。 K_2NiF_4 型構造を有するヒドリドイオン導電体において、小さな A サイト陽イオンを選択することで、A サイト-拡散 H 間の幾何学的反発を低減し、H 導電特性の向上が可能であることを明らかにしている。

第五章では、 K_2NiF_4 型構造を有する $\text{La}_2\text{LiO}_{3.5}$ 関連物質の合成と、その詳細な結晶構造について記述している。母構造である $\text{La}_2\text{LiO}_{3.5}$ は単斜晶系 $P2_1/c$ に属し、酸素空孔がペロブスカイト層内において規則配列した超格子構造を有することを明らかにした。 Mg 置換に伴い高対称の構造に変化し、 $\text{La}_2\text{Li}_{0.90}\text{Mg}_{0.10}\text{O}_{3.55}$ ($x = 0.10$) は特に高い酸化イオン導電率 (400°C) $= 1.38 \times 10^{-4} \text{ S cm}^{-1}$ の値を示した。酸化イオン導電体 $\text{La}_2\text{LiO}_{3.5}$ において、僅かな酸素量の変化により酸素空孔が不規則配列化して、イオン導電率が向上することを明らかにしている。

第六章では、計算科学を援用したペロブスカイト型フッ化物イオン導電体の探索結果が記述されている。第一原理計算により、相安定性と拡散障壁を算出した結果、 K 置換 BaLiF_3 が比較的安定かつ低い拡散障壁 $E_{\text{mig}} = 40 \text{ kJ mol}^{-1}$ を有することを見いだした。メカノケミカル法で合成した一連の固溶体 $\text{Ba}_{1-x}\text{K}_x\text{LiF}_{3-x}$ は高いイオン導電率を示し、 $\text{Ba}_{0.65}\text{K}_{0.35}\text{LiF}_{2.65}$ が 150°C において最も高いイオン導電率 $\sigma = 1.23 \times 10^{-3} \text{ S cm}^{-1}$ を示すことを見いだしている。

第七章では本論文を総括している。ペロブスカイト関連構造において陰イオン組成を制御することで、酸化イオン、ヒドリドイオン、フッ化物イオン導電特性が得られた。本研究で得られた物質系において、拡散種である陰イオンは $\text{F}^- > \text{H}^- > \text{O}^{2-}$ の順に高いイオン導電率を示し、陰イオンサイトへの多量の空孔導入によるイオン導電率向上が可能であることを明らかにしている。

これを要するに本論文は、陰イオン導電体の新たな物質群を見出し、結晶構造とイオン導電特性の相関に関する新たな知見と陰イオン導電体の材料設計指針を記述したものであり、学術上の貢献が大きい。よって本論文は、博士 (理学) の学位論文として、十分な価値があると認められる。

注意: 「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容